

コハクの自伝

―群れを守った十三年―

目次

小さな心臓が鳴った日

全力疾走の日々（1～4歳）

巡回任務の始まり（5～7歳）

ゆっくりと、でも確実に（8～10歳）

白い口元の微笑み（11～13歳）

最後の春

小さな心臓が鳴った日

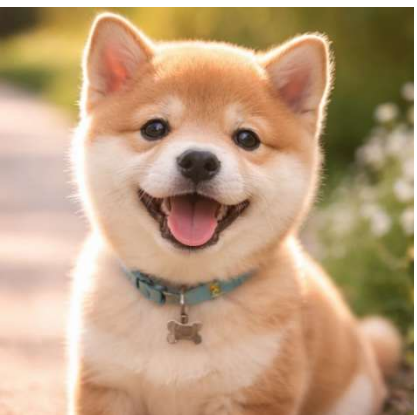
2011年の春、僕の人生は始まった。

栃木の小さな家で生まれた兄弟の中で、僕は一番小さかった。でも、目だけはしっかり開いていた。周りを見渡して、匂いを嗅いで、「ここはどんな場所なんだ？」って確かめていたワン。

生後ヶ月のある日、田中さんが僕を抱き上げた。温かい手のひらの中で、僕の心臓はドクドクと鳴っていた。怖かったわけじゃない。なぜか「この人だ」って分かったんだ。

田中さんは僕に「コハク」という名前をくれた。

その日から、僕の使命が始まったワン。



▽新しい家での点検作業

田中さんの家に着いた日、僕が最初にしたこと——それは「全部の匂いを嗅ぐこと」だった。

家具の隙間、台所の角、玄関の端っこ。僕は鼻を使って、この家の全部を記憶した。ここがリビング、ここが寝室、ここが子どもたちの部屋。一つ一つ確認して、

「よし、これで僕の守るべき場所が分かった」と思ったワン。

用心深い性格だって？その通り。でも、柴犬ってそういうものなんだ。自分で確かめないと、安心できないんだワン。

全力疾走の日々（1〜4歳）

若い頃の僕は、とにかく走りたかった。

河川敷の散歩は最高だった。リードを引っ張って、田中さんの腕が千切れそうになるくらい走った（ごめんなさい）。風を切る感覚、草の匂い、遠くから聞こえる鳥の声——全部が僕を興奮させたワン。

カラスに向かって走ったこともある。川に飛び込んだこともある。水は好きだったけど、出るときに自分の体重を計算し忘れて、よく足を滑らせた。田中さんが笑いながら「また？」って言う顔、今でも覚えているワン。

でも、僕が一番大切にしていたこと——それは「子どもたちの見張り」だった。

田中さんの子どもたちが泣くと、僕はすぐそばに座った。触らない。ただ、そこにいる。「大丈夫だよ、僕がいるから」って伝えたかったんだ。これが柴犬の愛情表現。距離を保ちながら、確実に守るワン。



朝、玄関を開けると、少し待ってほしい。きっと僕がそこにいるから。散歩に行くとき、いつもの道を歩いてほしい。僕の匂いがまだ残っているはずだから。

夜、静かになったら耳をすましてほしい。廊下を歩く足音が聞こえるかもしれない。

僕はいつも、群れを守っているワン。

田中さん、家族のみんな、愛してる。

ありがとう。本当にありがとう。

僕は今、とても幸せだワン。

コハクより、天国から――

また、どこかで会おうワン。

琥珀 2011年春～2024年春

享年13歳

永遠に家族の守護者として

(完)